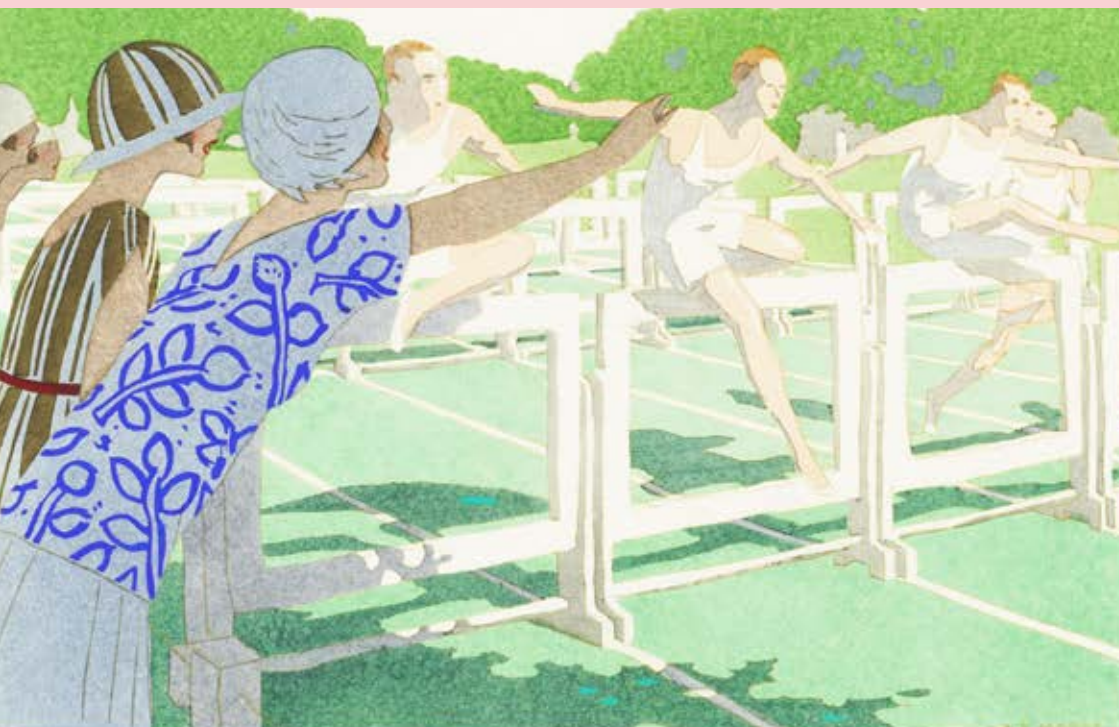


TAKE FREE

一人一品

歌人 井上法子

短歌「まだ夢のなか ずっと」



服をめぐる

衣服の研究現場より

09

服をめぐる 09

一人一品

井上法子（歌人）

短歌「まだ夢のなか ずっと」 p4

KCI Wunderkammer

ドロワーズ p12

地産街道を行く⑨

城陽 ラメ糸 p14

今日の補修室 第9回

衣装補修のビフォー・アフター③ p20

KCI 活動報告 p22

PEOPLE

ついつい集めてしまう服飾品はありますか？ p24

表紙の収蔵品



『Modes et manières d'aujourd'hui
(今日のモードと着こなし)』より
「RACING (競走)」

出版社：Jules Meynial Libraire, Paris
発行年：1919年

本品はビエール・コラルールによって1912年に創刊され23年まで続いたアート誌『Modes et manières d'aujourd'hui』のなかの1ページです。本誌は年に1回の刊行（第一次世界大戦中は休刊）で、毎号イラストレーターと作家を1名ずつ起用した豪華な誌面づくりが特徴です。本号では当時ファッション・イラストで名を馳せたアンドレ・マルティと劇作家のトリスタン・ベルナルが起用されました。

本誌について

『服をめぐる』は、京都服飾文化研究財団(KCI)が収蔵する膨大な西洋服飾コレクションを手がかりに、服飾の歴史や文化を分かりやすくお伝えする小冊子です。文学者やアーティストからの視点、日本の伝統産業との関わり、研究現場からのレポートなど、さまざまな観点から服飾の世界にアプローチします。服をめぐる旅が今、ここから始まります。

京都服飾文化研究財団(KCI)とは

京都服飾文化研究財団(The Kyoto Costume Institute, 略称 KCI)は、西洋の服飾やそれにかかわる文献資料を収集・保存し、調査・研究する機関として、1978年に株式会社ワコールの出捐によって設立されました。現在、18世紀から現代までの衣装など服飾資料を約13,000点、文献資料を約20,000点収蔵。それらを多角的に調査・研究し、その結果を国内外での展覧会（「モードのジャポニスム」展、「身体への夢」展、「FUTURE BEAUTY：日本ファッションの30年」展など）や、研究誌（『DRESSSTUDY』、『Fashion Talks...』）の発行を通じて公開しています。
Website <http://www.kci.or.jp/>



「ラグジュアリー：ファッションの欲望」展 京都国立近代美術館(2009年) ©The Kyoto Costume Institute, photo by Naoya Hatakeyama

一人一品

歌人×KCI收藏品

ゲスト

井上法子 Noriko Inoue

井上さんは1990年生まれ、福島県出身。塚本邦雄の短歌に感銘を受け、高校時代より作歌を始めました。2013年、第56回短歌研究新人賞次席、2016年に刊行した第一歌集『永遠でないほうの火』（書肆侃侃房）は、歌集としては異例の重版がなされ、大きな反響を呼びました。現在、東京大学大学院で短歌を研究する傍ら、『ユリイカ』、『早稲田文学』、『NHK短歌』、『短歌研究』、『現代短歌』など各種文芸誌で作品を発表。とくに『文学界』（2016年11月号）では、巻頭表現を担当するなど、歌人として積極的に活動されています。また、短歌のみならず、2016年、第69回福島県文学賞詩部門準賞、『雛罌粟』等の詩誌で詩を発表するなど、現代詩の世界にも活躍の場を広げています。

今回の『一人一品』は特別版として、井上さんにKCI收藏品を三品選んでいただきました。「美しいものを見るのが好き」と語る井上さん。KCIにもおしゃれをしてきてくださり、服飾への関心も高いご様子。さて、井上さんは、いったいどのような作品を選び、どのような歌を詠んだのでしょうか。



KCI 收藏品からうまれた短歌 「まだ夢のなか ずっと」

にぎやかな夜々にまみれて追っているまだ夢のなか ずっとなにかを

眼裏まなうらにつきのひかりをたたえつつ夢のころもを着るわたしたち

この宵のただしい闇をたずさえて（ほら、羽織るならパキヤンのコート）

微笑んで真夜の挨拶 燦燦うからと一族うからにうつる星の影かな

井上法子さんが

選んだ一品

その1

パキヤン店 イヴニング・コート

1909年冬

京都服飾文化研究財団所蔵 林雅之撮影

ベルベットによる花柄模様を織りだした青の絹サテン製コート。20世紀初頭、夜の盛装には本品のようなフル・レングスの華やかなイヴニング・コートが着用された。デザイナーのジャンヌ・パキヤンは1891年、パリに高級仕立服店を開店。当時の富裕階級の女性や女優たちからも高く評価され、フランス国外にも多くの顧客をもった。1900年パリ万博では服飾部門の総監督を務めた。



ちいさくていとしい夜明け／黄昏れの空の吐息を染みわたらせて

紺のリボンゆつくりとじる：ゆめでみるよりもはかない夜だったから

だからこそ教えてくれるこの生を綴じられるのは物語、^{イストワール}と

井上法子さんが

選んだ一品

その2

バッグ

1820年代

京都服飾文化研究財団所蔵 島山崇撮影

茶と青のストライプ柄を織りだした絹製バッグ。底は蛇腹式でコイル状の糸飾りやシークインなど繊細な装飾がつく。衣装の流行は19世紀になると前世紀の大きく膨らんだスカートから古代ギリシャの衣装にみられるような細身のシルエットへと変化した。それに伴いドレスの内側に装着していたポケットが消失し、本品のような手持ちのバッグが登場した。





井上法子さんが
選んだ一品
その3

ウォルト店 イヴニング・ドレス

1900年頃

京都服飾文化研究財団所蔵 リチャード・ホートン撮影

グリーンの絹シフォンとベルベットのツーピース・ドレス。アププリケやシークイン刺繍など、複雑な技法で飾られた夜用の豪華な衣装である。この水紋と植物のモチーフには、当時の芸術様式、アール・ヌーヴォー特有の曲線を多用した有機的なデザインへの好みが見られる。ウォルト店の創業者シャルル＝フレデリック・ウォルトは1858年、パリに高級仕立服店を開き、後のオートクチュールの基礎を築いた。

さみどりを纏えば想うころには見えない森や湖があること
こんなにも煌めきたちはおそれしらず。その光りごと抱かれにおいで
水紋のように瞳を燈にゆらし、にんげんとしてここに居るだけ



ドロワーズ

素材：綿
原産地：ヨーロッパ
製作年：1860年代

19世紀初頭から履かれるようになった女性用下着ドロワーズ。ゆったりした幅のズボン型だから、さぞかしリラックスできたことだろう。と思いきや、この下着、股がぱっくりと開いている。なんと危ないことか、と思うのは現代の考え方である。当時、下半身にフィットするパンツは未だ存在しない。ドロワーズの上にはコルセットが締められ、さらにその上からスカートを膨らませるための下着クリノリンを装着してドレスを着る。さて、その後用をたすことを考えてみよう。もしドロワーズの股が縫い留められていたら、どれだけドレスや下着類を脱がなければならぬか。(筒井)

珍品奇品も数多いKCIの収蔵庫

—そこはまさに「驚異の部屋」。



1860年代の下着装着の一例。ドロワーズの上にはしっかりとコルセットが締められ、クリノリンが装着されている。©The Kyoto Costume Institute, photo by Masayuki Hayashi



上：泉工業で製造されたラメ糸。様々な色や質感がある
下：福永均社長

京都の南部、城陽市に日本で数少ないラメ糸を専門に製造する会社がある。泉工業株式会社は昭和39年に設立され、独自の糸の開発を続けてきた。現在ではラメ糸を一貫生産する国内唯一のメーカーだ。二代目社長の福永均さんにお話を伺った。「もともとラメ糸を作る会社は城陽に多いんです。京都の中心にも奈良にも近いです。これまで和装に使用されることが多かったからでしょうね。」城陽では江戸時代、下級武士の女性達のあいだに和紙に金箔を貼って金糸

ラメ糸工場を訪ねて

京都の南部、城陽市に日本で数少ないラメ糸を専門に製造する会社がある。泉工業株式会社は昭和39年に設立され、独自の糸の開発を続けてきた。現在ではラメ糸を一貫生産する国内唯一のメーカーだ。二代目社長の福永均さんにお話を伺った。「もともとラメ糸を作る会社は城陽に多いんです。京都の中心にも奈良にも近いです。これまで和装に使用されることが多かったからでしょうね。」城陽では江戸時代、下級武士の女性達のあいだに和紙に金箔を貼って金糸

KCI収蔵品



マドレーヌ・ヴィオネ
イヴニング・ドレス「アンリエット」

1923年冬 フランス

京都服飾文化研究財団所蔵
操上和美撮影

金銀に代わる糸

ラメ (Lame(仏))とは、金属糸や薄い金属を細く切ったものを用いた織物の総称で、17世紀ごろから使用された言葉だが、フランスのファッション誌などで頻出するのは20世紀に入ってからだ。それまでの金属素材でできた生地を表記は「金の (dor)」「銀の (d'argent)」というように直接的に金銀を謳っているものが多い。実際の金、銀を含有した素材を身にまとうことで富や権力を示してきた時代のひとつの現れだろう。しかし現代に近づくにつれ、そうした特権的な素材は市民階級の人々の憧れの対象として様々な素材で模倣され、大量に出回るようになった。ラメ糸はそのひとつで、錫やアルミニウム、メッキで製造された。

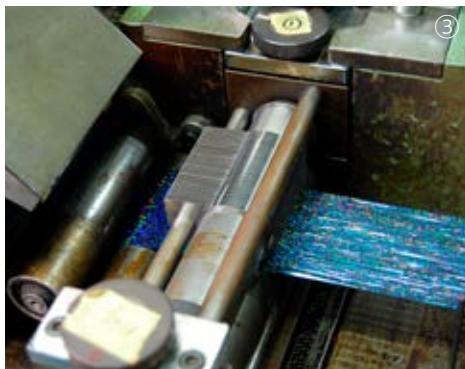
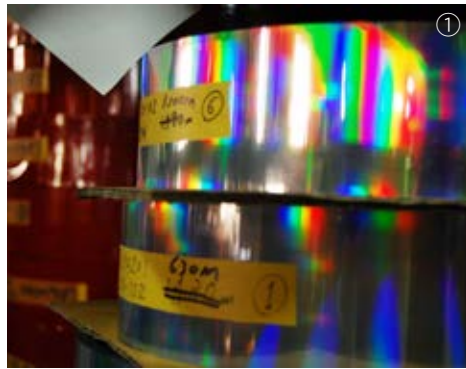


地産街道を行く⑨

城陽(京都) ラメ糸

KCIの収蔵品にみられる技法や素材を手がかりに、各地を訪れます。

KCIが所蔵する17世紀から現代の西洋服飾品類、約1万3千点のうち、ラメ製の作品点数を抽出してみると、とりわけ1920年代に集中していることがわかる。シャネル、ランバン、そして左頁上図のヴィオネも多数のラメ製ドレスを制作した。様々な明度で光り輝く金、銀。この時代、ラメをはじめ、ビーズ、シークイン、ラインストーン製のドレスは欧米を中心に大流行した。こうした煌びやかな服飾品は、S・フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』(1925年)で描かれるような華やかなパーティー会場を夜な夜な輝かせていたことだろう。

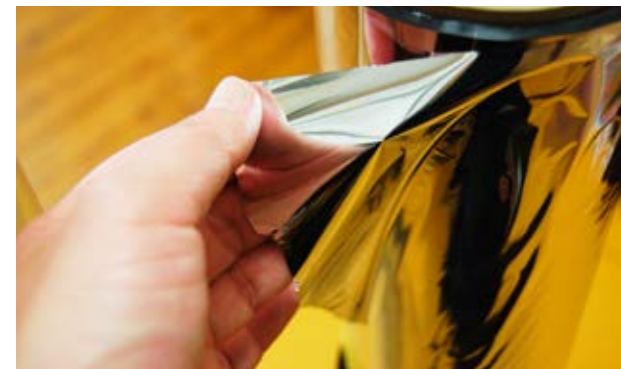


- ①原反のフィルムを大きく切り分ける(大切スリット)
- ②さらに細かく裁断するために機械にセットする
- ③鋭い刃で150本に裁断する(マイクロスリット)。これを後に撚って糸にする

透明のフィルムに銀を真空蒸着させたもの



ラメ糸の原材料となる透明のフィルム



や銀糸を製糸する仕事が広まり、材料や製法のかたちを変えながらこの地に伝わってきた歴史がある。「着物の需要が減った近年では、洋服や日用雑貨向けの出荷が増えていきます。」オフィスの応接スペースには、スポーツメーカーのロゴが金色のラメ糸で刺繍された上着や、野球球団のマスコットが銀色のラメ糸で織り出されたタオルなどが大量に並べられている。「100年前のラメ糸は金属を伸ばして切って、それを糸に巻き付けているものが多いと思いますが、現在のラメ糸の原料はポリエステルがほとんどなんです。」「金属ではなくてポリエステルなんですか?」

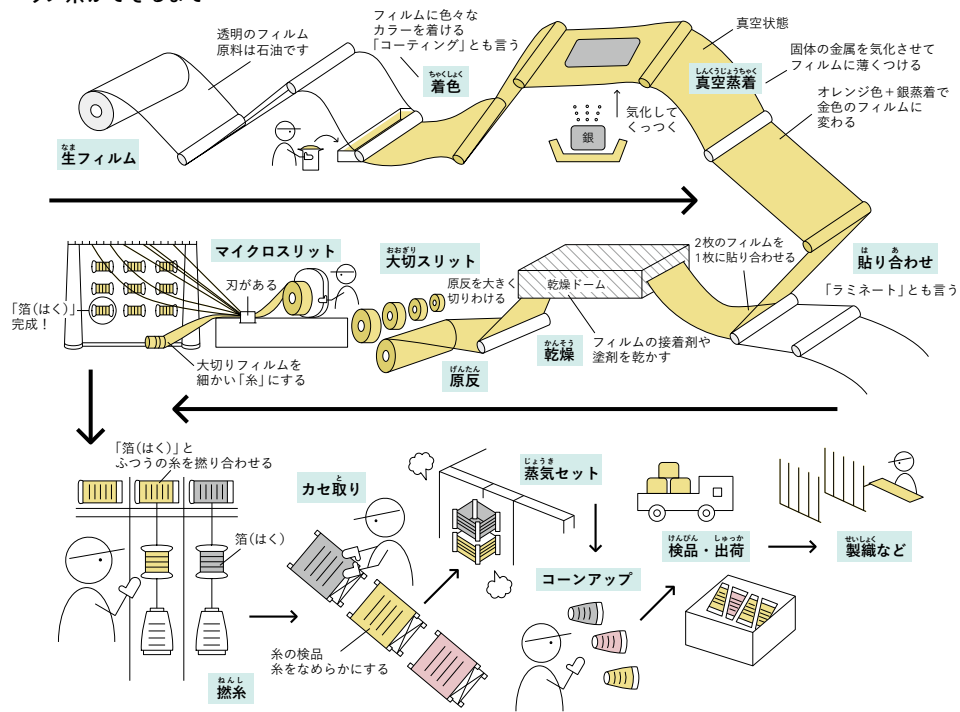
ボン、と目の前にロール状の透明フィルムが差し出された。「これがポリエステル製のフィルムです。まずこれに着色します。例えば、金色のラメ糸を作る場合は、この透明フィルムにオレンジ色を着色して、そこに銀を気化させてフィルムに薄く付けると金色になります。これを細く切って撚糸にすれば金色のラメ糸になるわけです。」私たちが普段目にする色とりどりのラメ糸の多くは、さまざまな色のフィルムと銀の組み合わせで出来ていたのだった。昭和30年代半ばにドイツのデュボン社がポリエステルの真空蒸着技術を開発したことで、ラメ糸の製造が飛躍的に進歩したという。

完成までの道のり

工場のなかに入ると、キラキラと七色に光るロールが目飛び込んだ。強く反射する光の波に一瞬、クラツとする。「これを細く切つて糸にするんですよ。その前段階の着色の様子もお見せしましょう。」10メートルほどあるうかと思われる大きな機械のなかをゆつくりと透明フィルムが通っていく。少しツンとする匂いの液体のなかを通過すると、やや黒光りしたフィルムになってスルスルと出てきた。漆のような艶感が美しい。「これは玩具用のものなんです。」用途に合わせてきめ細やかに製造していくのが泉工業の強みなのだ。福永さんはいう。わずかに違う色味の容器が機械の周辺に無数に並んでいるのもその証しなのだろう。試行錯誤の跡が工場内のそこかしこに見える。

次に案内されたのは、着色後のフィルムを細く切る現場だ。機械に縦にセットされたロールがクルクルと回り始め、銀色の刃の下をフィルムが流れる。すると機械の先から極細になったフィルムが次々と繰り出て途中から放射状に分かれ、一本一本が数メートル先にセットされたポビンへと吸い込まれていく。キラリとした幾本もの光の筋は、まるで夏の日に庭に撒くシャワーのようだ。聞くと150本に裁断されているのだそうだ。極薄で細いため糸切れには細心の注意が必要で、機械のメンテナンスは欠かせない。「こ

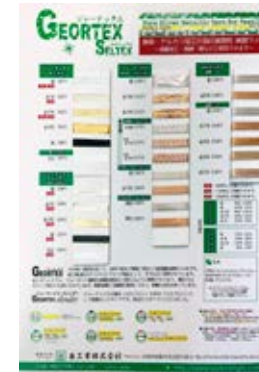
ラメ糸ができるまで



スカートの装飾に泉工業のラメ糸が使われている



malamute 2018年秋冬コレクションより



泉工業製のラメ糸見本

の糸状のフィルムをさらに芯になる別の糸に巻き付けていきます。」その後、「カセ取り」や「蒸気セット」、「コーンアップ」という工程を踏み、長い道のりを経たラメ糸がようやく完成する。

若手デザイナーの手へ

「生地になるときの扱いやすさや耐久性など、テストを繰り返しながら作っていきます。海外製のラメ糸は洗濯に向かないものも多いですけど、うちのは違いますよ。」糸1本に込められた技術と福永さんら生産者の思いは深い。小高真理さんはそんな泉工業のラメ糸に魅せられたファッション・デザイナーの一人だ。「とにかく他にはない個性的なラメ糸が泉工業さんにはあるんです。表情が面白くて。いつも使いたくなりますね。」小高さんは2014年にニットに特化したブランド「malamute」を立ち上げた。泉工業のラメ糸は最初のコレクションから使っているという。「最新のコレクションでは、撚りのないラメ糸も使ってみました。」と2018年秋冬コレクションの作品を見せてくれた。黒のスカートのうえに繊細で美しいラメ糸の輝きが線香花火のように弾けていた。

豊かな衣文化を支える技術

光や輝き方にも時代や地域によって好みがある。福永さんによれば、インドに納品しているサリー用の金ラメ糸は、赤黄色味の強いギラツとした金なのだそう。一方、日本人が好む金ラメ糸は明度を抑えたほのかな金だという。ほかの地域の好みをみれば、より広範なグラデーションがあるだろう。そうした差が地域の個性を輝かせ、衣文化を豊かにしている。そして、その背景には好みに応えられる技術をもった生産者がいることを忘れてはならない。

取材文・筒井直子 写真・福嶋英城

●取材にご協力頂いた企業・団体（敬称略）
 泉工業株式会社
 〒610-0114 京都府城陽市市辺西川原19
 電話 0774-52-0709（代表）
 ホームページ URL <http://www.izumi-kingin.com/>



今日の補修室

TODAY'S RESTORATION ROOM

第9回

衣装補修のビフォー・アフター③



前号に引き続き、
衣装補修のビフォー・アフターを
ご紹介します。

補修後



金糸で格子を作り、オリジナルの色に合わせて染めた絹手縫い糸でスカラップ状にステッチを施した。

補修前



装飾レースの一部が欠損している。

オリジナルが残っている部分から写し取った図案。欠損部を補う際のガイドとした。



補修された収蔵品

ドレス
1895年頃 フランス

京都服飾文化研究財団所蔵
広川泰士撮影

日本的な草花文様の織り出されたピンクの絹サテンのツーピース・ドレス。パールを留め付けたレースの装飾付き。

今号は、1895年製絹サテンのドレスの補修をご紹介します。このドレスには、サテン地全体に縦裂けが多数あり、ボディスとスカートの装飾レースにも破れと欠損が多くありました。

ここでは、スカートに施した装飾レースの補修を取り上げましょう。レースは劣化が進んでいたため、合印をしてからレースを一時的に外し、伸ばしてから絹チュールで全体を裏打ちしました。チュールの裏打ちは、網地の形を利用して編み糸を留めるようにして行っています。また欠損している所は、さらに欠損や破れが広がるのを防ぐため補いました。欠損部分はチュールを二重にし、あらかじめ作成しておいた図案をもとに刺繍をしていきました。糸には、19世紀の金糸や、現在の絹手縫い糸をオリジナルの色に合わせて染めた糸を使用しました。(伊藤ゆか)

KCI は 40 周年を迎えました。

KCI 40th
Anniversary

1978年4月、西洋の服飾文化を研究する機関として設立された京都服飾文化研究財団（KCI）は、今年で40周年を迎えました。本年はアメリカ三都市を巡回する展覧会がスタートし、講演会の開催や教育普及活動、研究誌発行など国内外において様々な活動を行ってまいります。ホームページ<http://www.kci.or.jp/>にて随時情報を発信しますので、ぜひチェックしてください。これから皆さまのご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

米国巡回展「Kimono Refashioned」(予定)

2018年10月12日-2019年1月6日 ニューアーク美術館（ニュージャージー州）

2019年2月8日-5月5日 サンフランシスコ・アジア美術館（カリフォルニア州）

2019年6月28日-9月15日 シンシナティ美術館（オハイオ州）

学会発表

佐藤萌（KCI コンサバター）がスイス・アベック財団で学会発表

学会名：「9. Kolloquium der Ehemaligen」

発表題目：「Dealing with modern material objects at the Kyoto Costume Institute」

日時：2017年11月3日～4日 会場：アベック財団（スイス）

私たちの身の回りに溢れたプラスチックなどの合成素材が、KCI収蔵品にも使用されています。エナメル製ブーツのべたつき、ゴム製ボタンのひび割れ、シリコン製靴の黄ばみなど、20世紀以降に合成されたプラスチック製の収蔵品は、手間暇かけて織られ染色された18世紀の絹製ドレスよりも脆いと言えます。中でもべっこうなどの模造品として20世紀初期に出回ったセルロイドは、自身が劣化するだけでなく経年とともに生成される有害な酸性ガスで周りの収蔵品にも悪影響を及ぼすことがあるため、特に注意が必要です。KCIではこうした現代素材の収蔵品の保存と研究に日々取り組み、昨年はスイスのアベック財団で経過報告を行いました。



黄変し、ひび割れた20世紀初期のセルロイド製扇の柄（京都服飾文化研究財団所蔵）。

KCI ギャラリー展示

「収蔵品紹介26：プレタポルテの幕開け 久田尚子氏のワードローブを中心に」展

会期 | 2018年1月29日(月)～4月27日(金) (土日休館)

会場 | KCI ギャラリー（京都市下京区七条御所ノ内南町103）

開館時間 | 午前9時30分～午後5時 [入館は午後4時30分まで]

年3回、テーマを変えて収蔵品を展示するKCIギャラリー。2018年最初の展示は「プレタポルテ」がテーマです。

「プレタポルテ」は1960年代に急成長し、1970年代に世界に広がった高級既製服のこと。ファッションを牽引していた高級仕立服「オートクチュール」に対し、手の届きやすいファッションブルなプレタポルテの服は、当時の女性たちに急速に受け入れられました。

今回の展示ではファッション誌の編集などにたずさわった、国内外のファッションの動きをつぶさに見てきた久田尚子氏 [1935-2012] からの寄贈品を中心に、1960～70年代の作品を通してプレタポルテが大きく飛躍した時代を振り返ります。ぜひご覧ください。



大木香奈

Kana Ooki



東京都庭園美術館学芸員。専門は比較文化史、近代工芸史。
 担当した主な展覧会は「アール・デコの邸宅美術館」、「並河靖之七宝」など。

手触りの良いブローチや髪飾りが好きです。陶器、ガラス、貝殻や漆など素材は問わず、見た目はもとより感触の良いものに惹かれます。こぞずっと大切に使っているのは、漆に金粉で装飾を施した楕円の髪飾り。ぱっと見は至ってシンプルながら、ふつくらとした優しい手触りが気に入っています。ブローチや髪飾りは日常的に触れるものなので、手から受け取る感触や温度に、ふと自分を取り戻す気持ちになれる気がしています。

藤井美代子

Miyoko Fujii



セレクトショップ「コトバトフク」店長。販売やバイイング、企画などを行う。

私は高校時代から服やアクセサリなどを買い集めてしまう収集癖がある。それは高価な物ではなく街のリサイクルショップやお直し屋で山積みになって売られている中から掘り出すことが多いのだが、それが楽しくてしょうがない。買ったものはあまり使わず、狭い家に行き場のない服飾品が日に日に溢れかえっていく。それから少し経つと、似合いそうな友人がいればあげて満足する。何故だか分からないがこれがやめられないでいる。

武岡 暢

Toru Takeoka



東京大学文学部助教。博士（社会学）。都市、移動、職業などに関心がある。
 著書に「生き延びる都市——新宿歌舞伎町の社会学」（新曜社）など。

強いて言えば外国に行ったときは何かその都市の思い出になるような服を買うようにしているかも知れません。特に古着は思い出深く、LAのカシミアのパーカーやNYのデオールの古いシャツなどはどちらも古着屋さんで買ったものですが色がとても気に入っています。しかし日本の古着屋さんも多くはアメリカからの輸入古着を扱っているんですね。社会学者としては、作られ方だけでなく、流通や着られ方まで含めた「メディアとしての服飾」のような見方に興味を覚えます。

服をめぐる

「服をめぐる」衣服の研究現場より 第9号
 2018年3月30日発行（年3回発行）

発行：公益財団法人 京都服飾文化研究財団（KCI）
 〒600-8864 京都府京都市下京区七条御所ノ内南町103
 電話：075-321-9221
 ウェブサイト：<http://www.kci.or.jp/>
 編集：筒井直子、福嶋英城、松坂雅子（京都服飾文化研究財団）
 デザイン：坂田佐武郎
 写真：成田舞、福嶋英城

編集後記

本誌5号（2016年11月発行）で小説「胸中」を書きおろしてくださった作家の千早茜さんが、このたび新刊「クローゼット」（新潮社）を上梓されました。この長編小説、実はモデルがKCIなのです。本誌でのご縁もあり、KCIの日常の仕事に興味を持ってくださった千早さんは、何日もKCIに通われ取材されました。「今日の補修室」（p.20-21）に出てくるような細かな補修作業の描写も必読です。「クローゼット」、ぜひお手にとってみてください！